

昭和十年五月廿三日第三種郵便物
昭和二十二年四月二十八日運輸省特別授受承認第三五二號
昭和三十三年九月二十五日印刷
昭和三十三年十月一日發行

第二十三卷

第九號

土 淨



天章

九・十月號

御歌

むまれては

まづ思ひ出ん

古里に

契りし友の

ふかき誠を

目次

巻頭言……………

(1)

十夜縁起の教……………

藤井實應(2)

創價學會……………

竹中信常(6)

念佛無間と浄土宗……………

須藤隆仙(10)

俳人一茶の素描……………

藤木隨教(13)

金光上人……………

開米智鑑(17)

小説 津戸三郎……………

鶴田湛泉(25)

阿彌陀經の理解……………

福富海岳(29)

卷頭言

この夏のこと。町内の子供たちと本栖湖から白糸の瀧へバスで巡つた歸路、大石寺を訪ねてみた。山門をくぐると、塔中十餘坊の竝ぶなかを、ゆるい段々になつた石疊の參道が、一町近くも續いている。夕暮れ時の曇り空の下、他に參詣者もなく、その道はひっそりと静もりかえつていた。

この閑寂さが、實はこの寺の本姿なのだろう。思うに、日興上人が身延からこの地方に退いたには、多分に隱栖の悲圖からと察せられる。少くとも、身延から師日蓮の眞骨を奪い重寶を持ち出して來たなどとは思えぬ。それが眞ならば、双方の徒の絶えぬ血闘の巷と化した筈である。これらの訛傳は、恐らくは、日蓮教學の眞髓を傳うるは此處ぞとの自負から來た、後世の假構であらう。お宮の松や森の石松の墓と同じ傳である。私にはむしろそれは日興を侮辱するように感ぜられた。

しかし、近頃の平常は、蜜にひかれる蟻の群のような學會員の參拜でごつたがえすらしい。門前には土産物屋が並び、塔中の諸坊は悉く宿泊休憩所と化して新築され、本堂脇には會館が數億の資を集めて建てられている。末世の希特とでも申そうか。だが、このような殷賑を、はたして開祖日興は喜んでいるだろうか。身延をモヌケのカラといい板本尊のみが幸福製造機だと説く呪物教の上に空疎な繁榮を誇ろうとする現状は、恐らく日興の素意とは全く正反對なものと想われる。大旦那波木井氏と容れぬ彼が、世をすねて隱栖し、そのために他者と交わらぬ偏狹な宗風を招いたのは、あわれんでよい。しかしそれが今日の假構と狂信とを生んだとすれば、正に墮地獄の圖と嘆かわれよう。残念な想いに、しばし佇立を禁じ得なかつた。

法然上人が南都北嶺の迫害を受けて、門下信徒の面々に群集を警め、没後の廟建設すら禁ぜられた遺誠の中に、私たちは迫害に對する靜かな抵抗と烈々たる信火のほとばしりを見るであらう。信火は徒らに狂熱の徒をかり立てる要はない。無理強いな勧誘もいけない。地味でも魂と魂とのふれあいに、永遠の生命を見出してゆけよう。念々刻々念佛による救いの外に光明の生活はあり得ないのがこの世の現實なのだから。そしてこのことを信ずる人々の心と心とのつながり、いわば蓮社の誓いこそどのような強風にもくじけぬ信仰の家を作りあげよう。「淨土」の友こそは蓮社の人である。(中村康隆)

十夜縁起の教



みのりの秋、田園は黄金の波をうち、山野は紅に美しく
いろどられ、なく虫の音もしげく、やゝ肌寒い風に身もひ
きしまり、讀書し内省するの好季節、十月から十一月へか
けて、毎年、淨土宗にては十夜法要が行われます。「十夜
念佛」或は「十夜講」ともいゝ、くわしくは「十日十夜法
要」で、昔は十日十夜の別時念佛の法要をつとめたもので
すが、今は或は三日、或は一日につゞめて行われています
本來は舊暦の十月六日にはじまり十五日の満月の夜に終る
ように行われたのであります。この法要は阿彌陀佛が一切
衆生を救わんとする大慈悲の本願が成しとげられ、われわ
れが南無阿彌陀佛申して助かることが完成されて、阿彌陀

藤 井 實 應

佛が阿彌陀佛と申す佛になりたもうたことを記念し、十月
の圓かな月の光を仰いで、その廣大慈恩を偲び、感謝をさ
げらる法要であります。

十夜とてかしこき法の教かな 也有

極樂はいつも月夜に十夜かな 浪化

もろもろの愚者も月さす十夜かな 一茶

○

今から約五百年前、後花園天皇の永享年中（永享元年は
西暦一四二九）將軍足利義教の執權職、伊勢守平貞經の子
に兵衛頭貞國という人がありました。はやくから佛法に歸
依し法名を眞蓮と申しておりましたが、感ずるところあつ

て、京都の眞如堂に詣で、三晝夜の別時念佛を勤めました。その満夜の明方に剃髪出家しようと思ひ定めて假り寝をし、時も五更（午前四時）になろうとする頃、夢に一高僧が現われて、貞國に告げられるようには「汝はまごころを以て、この世及後の世を我に頼めり、その心偽りなきによつて、來世は必ず淨土に生れしめよう、この世のことについては今、三日間待つように」とのことでありました。

夢かうつゝか、夢にしては餘りにもハッキリした夢、これは正しく靈夢、如來よりのお告げであると感涙にむせんだ。貞國は、そのお告げのまゝに随つて、剃髪出家を思ひとどめておりますと、その翌日、公事として父貞經は隠居して貞國に家督を相續せしめられることになり、貞國は將軍執權職につくことになつたのであります。これ全く靈夢の然らしむるところとよろこんだのであります。このことがはしなくも天皇の御耳に達し、非常に隨喜せられまして、三日三夜の念佛に繼いで、七日七夜の念佛を眞如堂で修せられることになりました。その勤行の式は、慈覺大師が中國より我國に傳えられた引聲いんじやうの誦經念佛でありました。これが我國お十夜の起原と申すべきものであります。

○

このお話によつても、よく分るように、念佛は只今より未來永遠のお救いであります。念佛は、身も心も生活もすべてを阿彌陀佛にさゝげつかえる道であります。念佛申す

ものは直ちに如來の光明に攝取せられて、そのみ光に守られ、導かれ、育てられ、明るい生活がなされるのであります。『無量壽經』に「斯の光に遇うものは、三垢消滅し、身意柔順に、歡喜踊躍して善心生ず」とあります。斯の光というのは、いうまでもなく阿彌陀佛の光明であります。念佛申すものは阿彌陀佛の光明の中に攝めとられ、この光に遇うが故に、三垢とて、よくふかの心、はらだちの心、おろかな心の三つの垢が消滅し、身も意もやわらかとなりよろこびにみたされて、善い心が生れてくるというのであります。斯の光は無量、無邊といわれ、全宇宙にみちみちております。たゞわれわれの心の眼が盲めくらんでいるから、その光の中にありながら分らぬのであります。我が身と心とのすべてをさゝげて南無阿彌陀佛と佛を念すれば、斯の光にあうをえて、光の中に明るい日ぐらしがひらかれてゆくのであります。貞國はまごころこめて三日三夜の念佛を修し、如來の光明裡に一つの靈夢を感じたのであります。誰でも念佛すれば靈夢を感じるといふわけではなく、又靈夢に限つたことではないのでありまして、南無阿彌陀佛となりますとき己は空しうなり「我」が捨てられて、物事が正しく見えるようになり、おのずから如來のお導きに預ることができるのであります。「我」がある時は物事をゆがんで見ますから、まちがいが多く、これが因もととなつて、いろいろの苦しみ悩みも生じて参ります。念佛申すものは如

來の光明に照されて「無我」に化育そだてられますから、自おのずから明るい生活に導かれるのであります。貞國は如來の光明の御導きにより、執權職につくことになりこの職務こそ如來より與えられし命めいであると懸命に勤めたのであります。たゞこゝで心に留めねばならぬのは、貞國は、はじめ剃髪出家しようと願つたのですが、別時念佛を修したその結果は出家を思いとゞまり、家督を相續することゝなりましたそれは念佛してすべてを阿彌陀如來にまかせ、如來のお導きのまゝに随つたのでありまして、はじめ願つていたことと與えられたこととはちがうのです。求めたものと與えられたことゝはちがつても、それはたゞみ心に随つたのであります。これが信するものゝ態度であります。自分の願ひもとめていたものがかなえられない場合も、これが、如來よりのめぐみであつたとうけとるのであります。執權職という榮譽ある職につけたのであるから、現世の御利益があつたのだということではなく、たとえ執權職でなくて、他の低い職に従うことになつたとしても、それは如來よりの教命とうけとつて、よろこんでやつてゆく信の態度に學ばねばならないと思うのであります。われわれお互いの日々爲すべき業務しごとというものはこれ如來より與えたまえる命めいとうけてよろこびいさんで、そのつとめを果してゆくべきであります。かくて念佛申すものは如來光明の攝化あそびだてによつて明るい、力強い生活にならせて頂けるのであります。

お互にわれわれの生涯に於ては、こうもありがたい、あゝもありがたいといろ／＼願うのでありますが、それが思うようにならえられるかどうか、それは分りません。その願ひ求めの中には利己的な身勝手なものもあろうし、或は純な動機によるものもあろうが、それらの願ひが、かなえられないのはどういうわけでしょうか「このように熱心にお願ひしているのに、少しも思うようにならぬ、神も佛もあるものか」という人もでゝきます。しかしこれは信なき人のことです。阿彌陀佛にまかせ仕えるものには、たとえ願ひと反對の事情に出あうとも、これは自分のはかり知ることのできぬ絶對なる如來のみむねであつたと益々研ぎ改め進むことゝなるのであります。ですから念佛者は、念佛の中に、よいと思つたことは、爲せよとの如來の教命であるとサツと實行する。まちがつていたと氣すけば、改めよとの如來の教命であると念佛の中にサンゲし早速改めて進んでゆくのであります。

○

さて、この貞國の眞如堂に於ける、三日三夜の別時念佛がもとになり、更に七日七夜の引聲念佛が行われましてから、約六十年の後、後土御門天皇の御宇、明應四年（西紀一四九五）三月、淨土宗の鎌倉蓮華寺の長蓮社觀譽祐崇上人は、勅命によつて、内殿に於て、阿彌陀經を講じ、且つ眞如堂の僧を集めて、觀譽上人が導師となり、引聲いんじやうの彌陀

念佛を修しました。天皇は非常に感激せられて觀譽上人に「何なりと願ひのことがあつたら申し出られよ」と仰せになりました。觀譽上人は「この度び、殿中に於て修しましたところの引聲彌陀經念佛は、慈覺大師の請來せられて日本に弘通いたしましたもので、殊に眞如堂の靈驗から事が起つて、十月に十夜の法要を修行せられました。是れ偏に念佛は諸經が失くなつた後も特に留めるとの釋尊の仰せあらたなる謂れであります。この引聲の誦經念佛及十夜法要を、この私共民間にも移さして頂き、淨土の勤行に備えたいと存じますから、どうか私共の寺に於ても、十夜法要を營むことをお許し願ひたいと存じます」と申し上げました。この事は請わるゝまゝに、快く勅許になりましたので、それから淨土宗の寺院に十夜法要を修することになつたのであります。これは鎌倉光明寺第九世源譽上人のお書きになつた『十月十夜略緣起』に出てゐることでもあります。

○

無量壽經に「此に於て十日十夜、善を修すれば、他方諸佛の國土に於て、善を爲すこと千歳するに勝れたり」とありまして、これが十夜法要の言葉の出どころであり、またこれが十夜法要に際しての心得うべきみ教えであります。この世の中は「正直ものは馬鹿を見る」ともいわれ、悪いことは行われ易く、善いことはなかなか行われない、悪人がはびこり、善人がしいたげられ、善人が損をし、悪人が

得をするといふようなことが多いのであります。それをそのまゝほつておいたならば、それこそみんなが滅びてしまわねばなりません。そういう世の中であればこそ、つとめて善を修さなければなりません。そういう世の中で善を修するからこそ功德大なりといわるゝのであります。お寺に参ると蓮華が飾られ供えられています。にごりの中から出て、にごりにします、美しい花を咲かす、この蓮華こそ、この住みにくい、惡の世の中に生きゆくわれわれの御手本であります。

念佛申す者は、人中の蓮華であると釋尊はおほめになりました。惡は爲し易く、善は行いがたい、われわれは、たゞすべてを大慈悲に在す阿彌陀ほとけにおまかせ申し、みほとけを念じ念じて、そのみ心を心とするように、念佛の日ぐらしをさせて頂くことが大事でありまして、この念佛生活によつて、佛のおまもりの中にこの世に於て、善を修することもできるのであります。御十夜法要の志すところもまたこの念佛生活にあります。

×

×

×

×

創價學會



竹 中 信 常

私は、先月、機會に恵まれて、法然上人と念佛について、放送をした。その時、たまたま法然上人についての、色々の傳記や語録に目を通して見て、しみじみ感じたのである。それは、法然上人が、あの當時、あれだけの思い切つた念佛爲本の主張をされたことは、ずいぶん勇氣のいつたことであらうし、念佛停止にしても、その後、ついに流罪にまでなられたように、はげしい迫害も、蒙られたことであつた。しかし、考えてみると、それまでの佛教、すなわち、聖道門、自力門を全部すててしまふということ、念佛だけで、救わ

れると主張されたこと。また、たとえ殺されても、念佛の主張はすてないと斷言されたことなど、そこには、何か、非常にはげしい、戰闘的なものが感じられるようである。なにごとによらず、古いものをすてて、新しいものを打ち建てるには、大變な勇氣と勞力が必要であるが、法然上人の、こうした念佛門樹立に際して示めされた態度を思うとき現在、私共の社會で、急激な勢いをみせている「創價學會」が思い出されるのである。むしろ、法然上人の立宗と、創價學會の現状とは、その本質や意味においては、全然異なるも

のがありはするが、とに角、いままでの佛教（既成教團・新興教團をとわず）をすべて邪教であるとし、大石寺の板まんだらと題目だけを正しいものとして、しぼり上げて行く勇氣と一本氣には、何か、迫つて来るものがあるようである。

私共は、こうした點を心において、も一度何故、創價學會が暴威をふるうのか、考えてみる必要がある。この點に心ずかれて、創價學會の實態と本質とについてくわしく知ろうとされる方々のために、私は、創價學會を知るに適當な資料を列舉し參考にしたいと思う

のである。

今まで、随分澤山、創價學會についての解説や説明が、新聞や雑誌にのせられた。しかし、單行本として出されたもので、私の手もとにあるのは、次の三つである。

創價學會批判、日蓮宗々務院編さん、昭和三十年七月刊、非賣品。

板本尊偽作論、安永辨哲著、多摩書唐、昭和三十一年六月刊、百三十圓。

創價學會、小口佐木共著、青木書店、昭和三十一年八月刊、二五〇圓。

(7)

この中、最初の「創價學會批判」は、日蓮宗々務院から發行され、非賣品にはなつてゐるが、申込みば送つて貰えると思う。価格は二百圓までぐらいだつたようである。この本は昭和三十年三月十一日、北海道小樽市公會堂で、日蓮宗身延派と、創價學會とが法論をした結果、創價學會側では、その宣傳力にものをいわせて、勝つた、勝つたと大さわざしていち早く、五月に「法論對決勝利の記録・小樽問答誌」という本を出したのに對抗して出

版されたものである。

内容は、歴史、教理、思想の三つの分野にわけて、それぞれ宗門の専門家に筆をとらしている。その説述は非常にまじめで、且つ、學問的に、具體的な資料を列挙して、まづ、日蓮正宗の分派成立を論じ、日蓮上人眞骨の所在、及び本尊について論じている。その態度は、比較的客觀的で、決してことさら正宗を否定しようとはしていない。これは考え方によつては、當然なことで、日蓮正宗というものの存在は歴史的事實なのだから、これを認めるべきであらう。次に教理篇では、創價學會の學説は日蓮正宗の教學すなわち、大石寺派教學を基盤にして、その上に「價值論」をつけ加えただけである。價值論というのは、創價學會の初代會長牧口常三郎が、西南ドイツ學派の價值哲學から翻案したもので、普通眞・善・美というところを利・善・美とし、利こそ、人間がすべて求め、これに歸着すべき大目標であり、宗教の價值もこの中におさまるのだとするのである。こうした價值論をのぞけば、創價學會の學説は、大石寺派富士教學と呼ばれる日蓮正宗の宗學を、そつくり

そのまま受けついだものにすぎない。

それならば、富士教學はどうかというと、これはすでに、その成立以來、常に日蓮宗諸派と爭論をつゞけてきた、いわば犬と猿の間柄といったもので、今更、これをどちらが正しいとか、まちがつているとかといつても、水かけ論のようなもので、論ぜらるべき點はもう論じつくされているのであるが、主書ではこれを改めて、また論破しようとしているのである。ただ、私共として注目せねばならぬことは、日蓮正宗側で、日蓮上人から正宗の派祖日興上人にだけ與えられたという、秘傳書が五つあり、特に本因妙抄と百六箇相承の二書を「兩卷血脉」として、一番大切なものとしているのに對して、身延を始め、正宗以外の日蓮宗諸派は、これを後年の偽作書としてゐるという點である。これが果して偽作であるなら、爭論の種は、よしあつても他に移されるべきであるが、それが未だに論決されないところに、水かけ論的な争いになるのではなからうか。それから、もう一つ、よしんば、それが眞物であるにしても、それは日蓮上人の流れをくむ者にとつては價值があるだ

ろうが他宗のものにとつて、それは單に、日蓮上人の思想をあらわした文書にしかすぎない。いわんや、これを、他宗を攻けきする武器にすることは、少くとも、學問的には意味をなさないのである。他宗、または他の宗教を批判するにはもつと妥當性にとんだ、一般理論を以つてすべきで、この點が、本文の冒頭にも觸れたように、法然上人のように、八宗を究めつくし、佛説をひろく涉獵した結果の理論と、ただ、日蓮上人の、それも眞偽未詳の文書を、馬鹿の一つおぼえのようにふりまわすのでは、外見は、自説を強調し、新説を立てるといふ點で似ているが、内容はまったく異つたものといはざるを得ないのである。こうした態度は、創價學會全體にみながつており、そこに、獨善的、戰闘的性格も含まれてくるのである。さて、本書の第三篇は思想篇として、「創價學會の暴力的性格と思想的欺瞞」と題されており、創價學會そのものの暴力的性格と欺瞞性について論じている。創價學會自體の批判としては、この篇が文字どおりこれに當るのである。

しかし、いづれにしても、この本は「小樽

問答誌」に對抗して、いわば「うけて立つた」という氣配が強く、積極性に缺けているように思われる。

これに對して、次の「板本尊僞作論」は約一年後に發刊されたもので、著者の安永辨哲氏は立正大學助教授である。この本は、前のは異つて、その序文にも「俗に毒を以つて毒を制す」という諺があるが、事實、時と場合によつては、こうした態度で臨むことが必要なものであると書かれてあるのをみてもわかるように極めて戰闘的で、暴露と實情とを主にしてゐる。私共、いづれかといへば創價學會の暴狀については、いささか不快を感ずるものにとつては、非常に痛快な叙述もしばしば散見する。例えば、第二篇の、今までの新聞等の報道機關に公報された記事の集録は、それほどまでに、世情人心に影響を與えているのかとおもうと、むしろ慄然たるくらいである。第一篇の「日蓮正宗歴代管長裏面史」は、正宗に歸依し、板本尊を拜めば、萬人すべて幸福になれるとする。その大もの正宗の歴代管長が、あるいは舌がんに苦しみ

あるいは政争に奔命し、あるいは山林亂伐して公費を遊興したり、ついには牧口會長の獄死等、一人としてまともな生死を完うしなかつたことを實に詳細に論じてある。さすが惡口雜言に巧みな創價學會も、これにはたまりかねて、目下これを名譽きそんで公訴中とのことであるが、こと程そのようにけんらんたる暴露である。第三篇は、本書の題目にもなつてゐる板本尊僞作論で、私共として参考になるのは、日蓮上人の題目特に「經」の字の書體を詳しく解説して、大石寺の板まんだらが僞筆であることを論證し、僞作だからこそ幸福製造機と呼ばれる板本尊を拜んで、逆に不幸に苦しむことになるのだと斷じてゐる。

第三番目の本は、東大助教授小口偉一氏と民科宗教部會の佐木秋夫氏の共著であるが、第三者的、且つ宗教學的立場で、純正に批判を試みているものといえる。小口氏は新興宗教批判者として著名であり、宗教ジャーナリズムでは専ら、この方面で活躍されている。佐木氏もまた、特に民科においては宗教批判を擔當されておられるようだし、新興宗教に

關しては、特にマルキシズム理論との關聯において、これを社會經濟史的立場から批判されている。かつて中央公論に心理學の乾孝氏社會學の松島榮一氏等のスタッフで、小口、佐木兩氏共同のもとに各新興教團の教祖の列傳が連載されたが、後にまとめて一本として、「教祖——庶民の神々」として公刊されたその中に、何故か創價學會にふれるところがなかつたので、私はひそかに感じていたのだが、はたして、それは特別に取扱われ、今度出版された本書となつたようである。

その敘述は、前の二書とはちがつて、すこぶる客觀的であり、第一部ではこうした宗教の生い立つて來る社會的、思想的前景を詳細に説明し、その第二部の理論批判では、創價學會の哲學的基礎とみられる「價值論」を解説し、このような理論が、いかにして正宗の題目信仰に轉用されているか、そのすりかえについて鋭い批判を加えている。第三部は創價學會の實態を、主としてその行動面——すなわち折伏運動の面でとらえ、斯る行動性が何によつて出て來ているか、そして、それがたどる方向が政治的なものか、はたして彼等

のいふような「第三勢力」として、日本の思想を更には政治を左右し得るに至るかどうかに ついてのみとおしを立てておられる。

私共が目下最も關心をひかれるのも、やはりこの點にあるのではないだろうか、かつて大正年間の世界的不景氣の頃、東京の裏町は「佛立講」のあの氣ぜわしい拍子木の音で一杯だつた。また昭和年代では、どこの家の佛壇にも、靈友會獨特の、あの幅廣の過去帳靈鑑が飾られるようになった。そしてつい先頃までは、立正交成會がのびて來て、東京中、いや日本中がそうなるのではないかとさえ思えたほどであつた。それが今度は日蓮正宗・創價學會に入れかわつて、これがまた、景氣よくのび始めたのである。いづれはほとぼりもさめるだろうが、それだからといつて、いたづらに、前がそうだつたから今度もそうだという、安易な態度は許るされない。ことに今度の場合は、今までの新興宗教にみられぬ特異のものを持つてゐるのだから、ただ慢然としてみていることはよくないことである。少くとも、以上に擧げた資料のどれか一つ、

ぐらいには、目をとおす必要がある。

それとも一つ、批判書のみでなく、彼等自身どのようなことをいい、どのようにふるまつてゐるかを、適確に知るためには、彼等の側の文書も出来るだけ知つておくことが必要である。その代表的なものは、昭和二十九年九月刊の「折伏經典」小平芳平著、創價學會刊、價格二百五十圓、が適當である。發行所は東京都新宿區信濃町三二の六 創價學會、振替一三一三三番である。その外、雜誌大白蓮華（月刊）聖教新聞等が發刊されている。



念佛無間と淨土宗

須藤 隆 仙

「念佛無間」という言葉は日蓮が元祖の念佛を批判した言葉で、有名な四箇の格言の中の言葉である。

これは別に何も深い根據を有しないものであるがこの頃創價學會だとか佛立講だとかという法華系の諸團體が、盛にこの説を以て念佛信仰を罵倒して歩いたり、淨土宗の檀家や寺院、果ては坊さんをつるし上げにするといったような非常識行爲をやつていたのでこのことに就て、お互に充分な認識を以て、邪説にまどわされないようにしたいと思う。

一體「念佛無間」などという説はどこから

生れたかという、端的にいうならば、それは日蓮が自分の宗派を宣傳する爲の極説に過ぎない。こういうと日蓮關係の方々は反論するかもしれぬがそうなのであるから、日蓮側としても、今後はこの言葉の使用に充分な認識が必要であると思う。

大體日蓮は周知の通り淨土宗や禪宗などより遅れて一つの宗派を開いた。その爲尋常の手段では宣傳の効を上げることができない。それで人の意表をつくようにしたのが、いわゆる四箇格言なるもので、念佛は無間地獄に落ちる。禪は天魔の業である。眞言は亡國の

罪である。律は國賊に等しい。という他宗に對する惡口である。

禪や眞言、律等のことはおいて、今淨土念佛のこと丈に就て述べると、この日蓮の説は實に無價値な、無意味なものなのである。

日蓮はどういう理由で「念佛無間」説を立てたかという、

①法華經は眞實のお經であつて、これを信じないものは地獄に落ちると書いてある。念佛者は法華經を信じていないから地獄に落ちる。

②法然は選擇集の中に、法華經を捨てたり、

閉ぢたり、闇いたり、抛つたり、する立場をとつているので、法華經の中に「これを信ぜぬ者は地獄に落ちる」とある文や、無量壽經の中に「五逆の罪人や、正しい佛法を謗つたものは彌陀の救済から漏れる」とある文によつて、地獄に落ちる。

以上の二點の理由である。

この二點を中心として立正安國論その他の著者に盛に念佛無間説を力説しているのである。だがこれは全く理由にも何にもならないものばかりである。

第一の理由は法華經のみ眞實で他は方便教であるとする立場に立つものである。これは支那の天臺大師あたりが立てた五時八教という佛教の整理方法の一つ（釋尊の説法を、その説いた時代に配別して、その中法華經が後に説かれた眞實の經で、それ以前に説かれた經は總べて方便とするもの）によつて法華經を最後眞實のお經とするもので、法華經を信ずる人達の自覺として意義あるものであるが、日蓮も現在の創價學會あたりもこの意義を知らず、これを以て他は方便教、甚しきは邪教と罵つて暴言活動を盛ならしめているの

である。

ところが法華經がいつ説かれたかというところになると學者の研究では釋尊七十二才、七十七才、入滅少し前、の三説が考えられ、逆に淨土宗の觀經（觀無量壽經）の如きは七十才、七十九才、入滅直前、の三説となるのであつて、觀經の方が法華よりも後のお經ということになり、法華のみ眞實とする説は一般性のある妥當的な説とはならないのである。勿論日蓮あたりはこの説を知らずに念佛無間論を立てているのであるが、當時の學問の状態からして、それは無理なことであつたとしても、この昭和の現代では通用しないのである。特に大乘の經典は釋尊の直説ではないという考え方のある現代、日蓮の説などは全く無價値なものとなるのである。經典の科學的な成立史研究の上からいつても、法華經の成立は西紀一世紀の後半頃と推定されており、このようなことを考えたなら尙更創價學會あたりは愚論を吐けない筈である。

とにかく法華經のみが眞實で他は方便とする説は多くの矛盾をはらんでいるのである。天臺大師の五時（釋尊の説法を五つの時期に

分けてみる）説からすると觀經は法華以後の經典であつて方便經の中に入らないのである。觀經は阿闍世王を中心とした悲劇から生れたものであるが、この阿闍世王の在世年代を見て、その説時を推考することが可能なわけである。

第一の理由がこのように不確實であれば、日蓮の無間論など根底から覆えされ、退滅してしまわなければならないのである。

第二に、元祖が選擇集の中で法華經を捨閉闍抛したという。これも選擇集の中に捨、閉闍、抛、の四字があちこちに散見するところから、この四字を集めて、組立てて、いかにも元祖が徹底的に法華經を排撃したかの感を抱かせるよう泥細工したものである。事實捨閉闍抛の四字は選擇集の中に使っているが、特に法華經に對して使っているのではなく、雜行雜修、定善散善、聖道門、などといったような廣い佛教整理觀の上についているのであつて、日蓮にしてみればこれらの中に法華經も含まれているから、というのであるが、その意味合は随分と違つたものになつてくる。例えば東西に分けて、その東の方を選ん

で西を捨てようという場合、その西の方に大石があつたとして、東を選んで大石を捨てたといったなら随分と意味合いが違つてくる。捨てたのは大石ではなく西方である。問題が大石にあるのではなく西方にあるのである。これと同じように問題は法華經にあるのではなくて、聖道門とか難修難行にあるのである。これを法華經丈に問題があるかの如く騒ぎ立てるのは日蓮のひがみである。元祖は選擇集の中に法華經を傍明の經典（傍ら淨土を説明している經典）としている。この一事を以て見ても法華經を捨てたり、抛つたりしているという言葉は出てこない筈である。又、地獄に落ちる理由として、無量壽經や、法華經の、正法を謗るもの、又信じないものは地獄に落ちるの文を引いているが、選擇集の中で、元祖は一語も、法華經を罵倒したようなことも、信じないといったようなこともいつていない。それぞれの宗派は皆それぞれの立場から佛教を整理配列しているのである。それぞれの經典の信崇のしかたも違つてくるといふ非常に妥當的な廣い正しい見方を各經典に對してしているのであつて、決して

一つの經典を誹謗するような愚は行つていないのである。

これなども全く理由にならない。七箇條の起請文の中には、彌陀一佛を頼み、念佛を信じたからといつて、他の諸佛菩薩の悲願を輕視したり、法華經般若經といったような尊い經典を誹謗したりすることを絶対に慎むべきであると戒め、このようなことをすると彌陀佛の悲願にも漏れるのだ、と誡訓している。このような元祖の眞意を知らずして日蓮は然らば法華經を捨てたと騒いでいる。

第二も理由として成立しないのである。

このように、日蓮の念佛無間論は根本的に誤りがあつて、正しい意味を認めることはできないのである。

この點、淨土宗としても、日蓮宗側としてもよく認識して、今後「念佛無間」なる誤語は破殺してしまいたいものと思うのである。

これは日蓮の流れをくむ人達の良識にまつべきであろうが、淨土宗側としても、以上の理をよく考えて、創價學會あたりの盲言にまどわされないようにしたいものである。

——お十夜にちなんだ——

俳句と川柳

あな貴うと茶もだぶだぶと十夜かな
(蕪村)

豆腐屋も出直してくる十夜かな
(乙由)

夜あるきの子に門で逢ふ十夜かな
(大祇)

すくいとれ十夜の汁の芋杓子
(成美)

梅道へユズ味噌匂う十夜かな
(一菊)

菜畑を通してくれる十夜かな
(一茶)

お十夜は案じるほどの旅でなし
(豊好)

月の出ぬ十夜に寺で月を見る
(鈴風)

俳人——茶——の素描



藤——木——隨——教

信濃では月と佛と俺が蕎麥

と一茶は言つてゐるが、姥捨山の月と更科の蕎麥と善光寺生き佛は天下に名たるものである。この平和な山里であり、牧歌的な高原の自然の町、春のめざめは遅く秋は早く海拔二千六百尺の信濃北邊、下々の下の國アチャとソソマと云はれてゐる程の越後境の山邊、何となく物寂しさを高原の大空に誘う柏原在に、寶曆十三年五月（芭蕉歿して七十年、蕪村生れて四十餘年）農小林彌五郎を父に生を受け、幼名彌太郎、諱は信之と云う。一茶は實母の人一倍の愛をもつて三年、三才の明和二年母と死別あり、八才まで女手の足らぬ家の忙しさの間に、祖母に一方ならぬ深い慈悲を蒙り、八才の時から氣の激しい無理解の繼母さつ女の下に仕へなければならぬと云う不運の歩みを人生に踏み出したのである。この幼年の茨の中に祖母の慈悲は後年の一茶に深い人情味を與へたと云へよう。

我と來て遊べや親のない雀

この句は六才のものと稱されてゐるが「親のない子は何處でも指をくわいて門に立つ」近隣の子供らにかく言い放たれて、獨り裏庭の藥ボツチに倚つて淋しい思いの中に、小雀の愛らしさを呼び求めていたことであろう。祖母は一茶十四才寛永五年氣になる初孫を後にみまかつていつた。孤兒的一茶の楽しさの無い七年間の苦難は重く覆いかぶさつていつた。二十七才の後妻さつ女は、好學の一茶に「百姓するに學問なんぞは必要がない」との一語で、本陣へ手習の身を全く摘みとられ、智識欲を停止されて仕舞い、家仕事に追い廻され、あまつさへ異母弟仙六を終日お負され、母の愛も充分知らぬ孤兒同様の一茶は繼母の顔色を見つゝの生活は何んと云う哀れとも殘間しさとも云へぬ、おどおどした少年となつて、父と繼母、繼母と一茶、一茶と弟仙六と三つ巴の家庭不和が續けられていつた。

「弟仙六の抱守りて春の暮おそきも、鼻に涎の衣を紋り秋の暮はやきも尿に肌を乾く時なかりき。仙六むづかる時は態となんあやしめる如く、父母に疑はれ杖の憂目を受るくこと日に百度月に千度、一年三百五十九日、目の腫れざるることなかりけり」

と父の終焉日記の餘白にある一文である。

一茶十四才の春、父の勧めにより人に託されて江戸へ放たれたのである。その時の記を見ると、

「一寸の孝を盡さんとすれば、直に一尺の魔のそねみに遭い、小鹿の角の束の間も家の治まる時もなかりき、父は我を一度古郷を遠ざくるにしくはあらじと思はれけん。十四才の春の曉、しほしほ家を出でし時、父は牟禮まで送りたまひ毒なるものは食べうなよ、人にあしさまに思はれなよ、とみに歸りて健かなる顔を再び見せやとて云々」

彼の一生魂に滲み込んでいた最後の言葉「とみに歸りて健かな顔を」故郷に對する彼の魂を執念にまで貫らぬき通している彼の魂の純心に敬服するものがある。彼の放浪後片時も故郷を忘れず父の魂を活かしているのである。

○

一茶の出生期は明治期の社會文物の複雑と同様に、この當時の關學による西歐文物の影響且つ國學の研究による古代精神の復活が叫ばれ、その中間を頽廢の傾向が濃い流れを持ち、この激動期の中に社會はこの複雑を抜け出て精神の統一を求めてやまなかつたのである。と同時に、一部俳壇にもその欲求はあつた、そこに天賦の野人

性を持つ一茶はこの道のそれを望む者に慕はれ交はれていた。彼は江戸に出てから二十五才頃まで生活狀態はその消息が不明であつて、天明七年江戸俳壇に初めて小林杞楠の名が発見されている。次で寛政二年二十八才で芭蕉系葛飾派の二六庵點者となつてゐることから當時相當の地位にいたことがわかる。然し一茶の性格から世間的成功を願うのなら、葛飾派を代表するその主流である三世其日庵溝口素丸にへつらわなければならないが、彼の繼子根性ばかりでなく當時の俳壇に相當な一見識を持つていた彼は、俳壇芭蕉の道はこの期には因襲的墮性の中にかたまり、根據の無い榮達のために師弟間の暗闘の俗惡のために俳諧その道を離れた俳諧道のその社會を嫌い、他人の力に頼る自分の魂を何物かに寄生しなければならぬ人の世界には伸々とした藝術はない筈で、俳諧は一人の俳諧にあらず天下の俳諧でなければならぬ筈である。

深川や鵜飼山の秋の月

三日月や江戸の苦屋も秋の暮

山吹をさし出さうな垣根哉

あとくの人へに倦れた梅の花

×

ぬぎすてし笠に一ばい蟻かな

影法師の疊にうごくふくべ哉

湖や小一里餘所の花火かな

前者は葛飾派宗匠流の句で世に對する浅い心で歌つてゐるもので、後者は宗匠の座にあつて葛飾派とは類を異にした革新的熱情の句で

ある。當時の空虚な懈怠の安全第一の宗匠連からいやがれるのも無理がない。

○

故郷は縄まで人をさしにけり

ふるさとやよるとさはると茨の花

思ふまで思まじとすれば我家哉

父の遺言により遺産分配のことで、繼母異母弟一類の専横の邪惡に憤り、長い／＼争いが續けられ苦惱と貧と忍従の苦難が、ぐいぐいおそいかゝつて來るこの悲境の中に、江戸の理解のある友江戸淺草藏前の夏目成美の庇護と慰めにより、野人一茶は悲境にむち打ちつゝ俳諧道に、彼の性格もさることながら貫き通していたのである。

「松かけに寝て食ふ六十餘州かな」この積み上げた熱い涙は、文化元年正月「今歳は革命の年である。あゝ我は四十二年他國に星霜を送る」と自懷している。と云うことは彼のおちつきを見せていることになる。文化元年より同五年の彼の「旅日記」の心境を窺うと、文化七年四十九才の「七番日記」。文政二年五十七才の「おらが春」に到達する悟りの前夜とも云へる安心の惱みを知ることが出来るのである。

月花や四十九年の無駄あるき

五十にして冬ごもりさへさらぬなり

苦惱と窮乏の老いの血涙をして押し進めて來た彼には、故郷の檀那寺の住職や幼友により、長かつた遺産のことも完全とは云へぬが分配を受け、未熟ながらに安心境の灯が見え始めたのである。

人なみの正月もせぬしだら哉

世の中の梅よ柳よ人は春

「とみに歸りて健やかな顔を云々」江戸へ初旅の父の言葉と、又父の遺言中の「我往生ばし逐げなば我申す通り妻して此國を遠さかること勿れ死後たりとも背くな」この言葉を心に綴りつゝ野人には野人の生活はあつたが、彼は故郷を忘じ難く、絶えることなき故郷への安住の願ひであつた。今こゝに

見限りし故郷の櫻咲にけり

ふしぎ／＼生れた家で今朝の春

○

あゝ不運の者は何處までも不運である。四男一女の春が飛來したのもつかのまゝ次々の夭折、加へて連添う最愛の妻を失い、更に一茶は中風に襲はれ、さ中に三男をもうけ、日陰に花を見る間もなく夭死、残された四男は手鹽の外で死を聞き、いつ甦生の老いの春芽が出ることであらう。

朝夕に覆ひかぶさるまゝは木の日陰花

撫子やまゝは木の日陰花

彼三才この方晴々しい世界に芽を出す日も無く今年もこんな齡となつて仕舞つてゐる彼の宿命を宿命としてのおちつきが、彼の人間凡愚としての安住である。そこに一茶の叫びは

まゝ子が一つ團扇の修覆かな

悠然として山を見る蛙かな

そして誠に彼の圓熟さを證明するものは文政二年一茶五十七才の時

の「おらが春」の記である。それは

目出度さは中位なりおらが春

から始まり全巻二百餘句中貧苦惱や、しがみ等の暗影は全く無く明澄そのもので盛られ、

ともかくもあなたまかせの年の暮

に終つてゐる一卷で、この記の内意を申すと、阿彌陀さまのみ前へ自己全體を投出したところに自己を發見した悟りが「ともかくも」であり「中位」なのであつて、こゝに人間凡愚の悟りの境地を擲んだのであつて、苦難に徹した満足とか、凡愚に徹した安心では無いのである。

次に彼一茶の後年の心境を探ぐつて見ると、一茶の願望精神の上に、その生活身邊の強い影響から父の終焉記となり、その精神の闘いが圓熟境へ積み上げてゆき實現されたものが、おらが春に成熟し更に積み上げてゆく新しい精神道中の闘争に打ち勝つことが彼は出来なかつた。それは彼の生活と藝術は恰も三日月から満月になつた成熟さと云うか、その圓熟は返つて十五日を更にあるとしたら十六日の満月に太らすことが出来ず、缺けて動きの静さを失い、その静寂は單調さとなり、九番日記の表現となつてゐるのである。

○

彼は五十二の春を迎へて菊女と結婚した。四男一女の父となり。

子供等は次々と夭折、しかも糟糠十年の妻にも死別し、その間の彼の感動の叫びの一部を窺うと

逃しなや水祝はるゝ五十聲

我が菊やなりにもふりに構はずに（妻菊女のこと）

目出度さは中位なりおらが春

ともかくもあなたまかせの年の暮

這へ笑へ二つになるぞ今朝からは（長女さと女へ）

露の世は露の世なからさりながら（同女夭死へ）

秋風やむしりたがりし赤い花（同女の墓で）

名月や曉へ這ひ寄る子があらば（同女へ）

今年からまるもうけぞよ今朝の春（一茶中風癒へて）

陽炎や目につきまとう笑い顔（三男石太郎へ）

おさな子や笑ふにつけて秋の暮（四男金四郎を後せし妻へ）

小言いふ相手もあらぬ今日の月（妻を失くして）

かたみ子や母が來るとて手をたゞく（亡妻新盆）

次いで文政七年六十二才士分の娘雪女と再婚、三ヶ月で離婚

糸爪蔓切つて了へばもとの水

案外菊女程の愛情もなく、けろんとしている。翌年やを女を迎へ、

その翌年やを女懷妊中失火あり。

螢火もあませばいやはや是ははや

家財の殆んどを失つてゐるが、誠に彼の心境は「いやはや是ははや」と人間的凡愚を表現している。類焼を免かれた土蔵に移住して

焼土のほかりくと蚤騒ぐ

彼はどこまでも平明である。文政十年十一月十九日六十五才、中風再發一聲の念佛を期して

鹽から鹽にうつるちんぶんかん

（了）

殉教の聖僧 金光上人 (三)

開米智鎧

三 阿呆唄

假令、熱烈な信仰心からとは云へ、冷雨の中に裸體で寝たり、傳道の爲めには土の牢獄Ⅱ民治獄は土牢Ⅱに入れられたり、生活衣食住も極度に貧窮したりで、流石偉丈夫の上人も遂に健康を害はれた。建保元年十一月上人六尺三寸の巨體は衰弱を生じ、吐血病Ⅱ文治の藥師には、ウツリ病と云うⅡで大樹の根本に倒れた。こゝで村人は、痛く感じて丸太作りの小屋を建てて、是に住まはせ、衣類や食物を施した。上人は涙ながらに喜んで、我が心は天地百千萬億の淨土に通じ、阿彌陀様の光明に救はれて、我は今、法のため、雨雪の中に身を捨てるとも、未來は不退の九品上生に即身成佛せんと。

上人は、藤崎沼で水藻をとつて、日光に乾かし、それを編んで寢具とした。蒲穂を採つて麻布に包んで、敷布團とした。隨想錄十二月二十日の條、「寒し、また寒し。水藻寢具にくるまりて、春を遠くに、阿彌陀佛」。二年二月十七日、「寒し。粉粉雪は、水藻寢具に、眞白なり。篠屋の枯間の灰空の月〇不明寝る我れ、念佛を唱へながら、目を閉る」。三月十五日「春ぞ近し。天日を見る日を多し。のこれる飯米一合足らず、干山草ヒヤマクサもなく、薪木なし。生木を伐るは、殺生罪となる。今日はせんかたなく以下文。或は此の日は、食べずに暮したかも知れない。

上人傳道生活の有様を、「金光坊落日の譜」に草深い行丘の馬捨森に、ひとり塹を作つて念佛を唱へて

いたが、民衆は之を嘲つて、誰が作つたか笑い唄う者があつた。

六尺三寸四十貫、

人の三倍力もて、

人より三倍賢くて、

阿呆ジャなかに物貰い、

朝から夜まで阿彌陀佛。

之を真似て村童は、石や棒切れを投げつけたり、小犬をけしかけたりした。然し上人は、常に笑顔を離さなかつた之を憐れんだ老婆があつた。或る日、上人の住み家に訪ねて来て何が欲しくて念佛を人に教えるのかと聞けば、上人はおもむろに座を正して、迷へる衆生を救う爲め、朝夕なに、念佛を唱へていと。老婆は心に不思議に思つて再び聞き返した。御坊は、唄の文句にうたわれて悔しいとも思わずに、怒るところか喜んでゐる。私は思うに、氣狂者と考へるが。

上人は笑つて、假令村人村童が唄いはやして居ろうとも私は是で満足だ。タトエ阿呆唄の文句でも、阿彌陀佛と云う念佛がある。之にそむいて怒つたら、私の願は寸刻に破れて罪になる。石や棒切を、投げつけられても、嘲つて人がうたつても、佛の施しと思つてゐる。二年六月五日の條に、「淨土の法、知るや知らずや、阿呆唄に、南無阿彌陀佛の一文あり」

老婆は顔に涙ぐみ、ア、知らなかつた。知らなかつた私も村人も知らなかつた。何と愚かな心であらう。ゆるして下さい御坊様。有り難い其の法を、後生の爲めに教えて下さい。老婆は、涙ながらに伏し拜んだ。それが村中にひろまつて、皆寄り集まつて上人の説教に耳を傾ける者もあつた。然るに、之を敵視するのは、荒吐黨である。またも上人苦説の教えも空しくなつた。

老婆は度々飯米を持つて来て、上人に與へた。然るに老婆は、年の卯月に、フトした病の爲めに眠るが如く往生した。上人は悲しんで、村人や住家の喜ばない才念佛を唱へた。童達は、ドツト笑つた。葬儀が済んで歸る時、住家の市兵衛は、急ぎ上人をつかまへて、今の念佛の中に、西方常住阿彌陀佛、觀音、勢至とあるのは、如何なる文句か。

上人は、兩眼を閉ぢて答へた。西方は常に、日の暮れて行く尊い方角である。阿彌陀様は常に彼の方角におはせられ、我等衆生の三世一切を悟とし、若しも臨終に入る者は、彼の國即ち、西方極樂世界から觀音勢至の二菩薩が、御手に八葉蓮華の台を持ち迎へ來つて、五色の雲に乗せて連れて行く。人間としての屍は、土中に埋まるとも、靈魂は既に西方に飛んで、極樂天女の舞う國の阿彌陀様の許に至るのである。

極樂國は四季もなく、夜晝の區別もない。常に奇妙な美鳥が囀る。らんまんの花の中に、天女と共に居る。人間

世界は、露ほども及ばぬところである。

時に市兵衛は進み出て、然らば其の國に住するには如何いたせば宜しいか。上人は、常に念佛を唱へよと。市兵衛大に笑つて、あの阿呆唄の文句に出る、阿彌陀佛を、眞心こめて唱へる阿呆があるものか。

上人は、阿呆と笑う者の心こそ、阿呆である。汝は、人の偉さを知らぬのだ。美をかざり富をかざり、口前を飾る者、また権力や武勇の者、人の上に立つ者も、それは一時の盛りである。我が教えでは、かようなものは凡べて空、人々に阿呆とそしられ、それを怒らず憎くまずに、唯一向に念佛を唱へるのは、氣狂沙汰では出来ないものだ。欲をすて美飾^{カサリ}をすて、女情を捨て、唯一向に淨土の道へ歩を進める心は、其の道に入り、三寶に歸依した者でなくては知ることが出来ない。残念だが、汝が偉い人と云うのは、富や権力ある者でなくては偉い者と思へぬのは、愚かな心である。

淺墓な心の持ち方は捨てるが身のため、世の爲めである。汝は才念佛を唱へずとも誠の心でいるならば、人や凡べての鳥獸にまでも好かれるのだ。

彼は涙を流して、御ゆるしあれ。我は心を改めて、眞人間になり申すと、地に伏して上人にあやまつた。上人は獨り言して、ア、今日は、何とよき日ぞ。また一人救つたのも阿呆にさへ我が教えは生きている。有り難や南無阿彌陀

佛。

上人は、大空を仰ぎ見て胸一杯に氣を吸つた。日は西山に傾いて八日の月は東の山に登つた。何處へ飛ぶのか親子の雁は西の方に行く。上人は之を見て、渡り鳥さえ古巢に歸るが、私の歸る古巢は何處だやら。兩親の尊顔も知らず。上人は捨て兒だと傳へられる。子守唄さえ聞くことも出来ず。南の郷里の面影を偲んで、いつぞとはなしに兩眼は曇つた。ア、無常、凡て過ぎ來く日は遠い夢である。我が身は既に幾星霜を過ぎて、全髮白くなつた。長い浮世に短い命。上人は塙に歸つて、少時我が身の過去を思い出し、涙と共に、悲愁の思い出が多かつた。年月日不明の隨想に「遙かなる南の空の果遠く、呼べど、さけべど郷里の便りは、空の渡り鳥、鳴く聲きくも、落葉の音ぞさわがし、聞くも得ず」と。

上人は落る涙を、清き水に洗い、帆立貝に飯をたいた。鹽で山菜を煮て佛前に供へ、夕の讀經を終へて之を食べた。今夜も、一刻三禮の木像を少時寝る前に到んだ。干した水藻の夜具を着て眠らんとした。夜の靜寂に、谷の瀬音や、虫の聲。上人は是れ皆、南無阿彌陀佛の聲と聞いて、いつか深い眠りに入つた。二月十日の條、「法の爲め、雪を夜衣に寝る夢は、暑し天竺の、佛國に遊ぶなり」とある。

明けて早々に起き、顔を洗い清めて、日の出を拜み、山

谷を歩いて、山菜をとり、薪を集めて飯を炊く。佛前に供へて朝の讀經をする。法衣の破れを縫つて、またも布教に出る。是の如きは毎日である。或る日、土地の國守、北畠朝臣親國に會つた。上人が一禮したら親國は、馬上から下りて金子三貫を與へた。又使をもつて、飯米十貫を與へて歸城した。上人は貧しいながらも、之を方々の、貧者に分け與へて、彼等と共に、喜びを分け合つた。

隨想錄は、建保四年七月までは、殆んど残存してゐる。一月十日、雪を降る。浮世の塵を消す如くつもる。風は寒し。灰色帳とまりの空に、唸りをあけて我今は死にたくなし人々に光明の一點も放たず今までの何が爲めの、苦行ぞや。二月一日、寒中の野山は珍らしくも今は晴れ渡り、野兎の群は、我が世の如くとび遊ぶ。笹屋の内に舞い込めだ雪を外にすてて、泉の水に顔を洗い、残り少なき米をとぐ。二月三十日、春の知らせぞ小雨ふる。谷のせゝらぎ、清けき水音を立てて、岸邊に一連、露のとうの蕾いづ。我今年こそ、淨土の花を、咲き亂さん。春にめざめる人々の眞心に。

三月十五日、小雨けふる小春の山々、里の人家に、童唄聞え來る。春は來る。老心にいかほどぞ、待ちたる春は來る。踊りたし唄いたし。然るに其の翌十六日、上人はまた吐血病で倒れた。三月三十日、佛法、佛法僧と、啼く山鳥の大自然の恵みぞ、また尊し。我が教えは、自然にそむき

たるか。四月十五日、里人の白眼する目と、心の奥そこ、金光の淨土の法ぞ、いつにとゞまるや。春とは云へど、未だ風寒し、津刈の里。と布教の涉々しからぬを、嘆いてゐる。四月三十日、阿呆、阿呆とはやされる里道を、念佛唱えて乞い歩くも、悲しと思へば、また悲し。嬉れしと思へば、また嬉しきことばかりなり。

五月十五日、我が體重くして、水田の仕事に、手傳出來ぬことぞ悲し。說法以外に、何ぞ出來ぬ身ぞ、またかなし五月三十日、我が體ぞ巨大にして、心のすねる時ぞあり。はづかし。僧となりし身を以て。六月十五日、苦行幾星霜その驗しるしまた淺し。津刈の里に來て、多くの學文も無用なり。正中山に登りて、忍玄坊より心を學ぶ。六月三十日、人々の好むものは、何處にぞある。我其の有處を知らず。七月十五日、人々の心の中に、生滅の無常の風も知るなれば、淨土の法は、なぞためにある。荒吐黨とは何ぞや。修驗宗とは何ぞや。進める道は一ツなり。萬國萬海皆淨土化へ。

四 鎌倉往來

偉人の胸中にも、望郷の念偲び難いものがあつたであらう。年月は殆ど不明であるが、上人と鎌倉との間には、相互に何程かの文書往復があつたらしい。上人の奥州下向

は、鎌倉長谷寺からと記されている。上人は鈎拋岳で布教説法の時に、吐血病で倒れた。三本木の小屋を建て、手當を加へた者があつた。上人は喜んで名を聞いたら、雨太郎と答えた。上人は持つていた錢一貫を同人にのべて、汝は我が命の恩人である。私は頼み度い事がある。此の一通の書狀を急ぎ鎌倉の長谷寺に届けて下され。此の金は、當座の路銀である、雨太郎は心中思はぬ大金が入つて喜んで之を引き受けた。

然るに雨太郎の足は、鎌倉には行かないで合浦の遊女酒場に遊んで、一月半を過ぎて歸つて來た。そして偽り言を述べた。上人は、心中不審に思いながらも之を喜んだ。病氣を通知したものでろう。そして不審に思い乍も、人を疑はぬ上人の人格が偲ばれる。

上人は或る年の夏の暑い日に、石川村（南津）に行乞に行つた。一農家の藁屋の窓に阿彌陀經があつた。上人は驚いて其の家に入り色々説明したが、農民は笑つて聞き入れない。上人は心痛して、乞米三合と交換して行丘に歸り、御念佛を唱へながら其の經紙を以て、紙泥の阿彌陀像を作つて西方庵に安置した。然るに此の邊の村民は、皆無學の故に御經を火種付木に代用したり、便用に使う者さえあつた。上人は大心痛して、食物も口中に通らない。暑熱も忘れて日夜に經紙を集め歩いて、漸く集めることが出來た。

弟子の法忍坊を、鎌倉に遣はして信徒に此の旨を傳えた。冬十月に法忍坊は、行丘に歸つた。法然上人自筆の御手紙と阿彌陀經三部、佛告三起文書（意義不明）を持參し

た。禪師行狀に、建保初年、勢觀房源智上人が般舟贊と吉水遺誓を贈られた記事があるが、或は其の時かも知れぬ。法然上人の御手紙の大意は、噫、金光房よ。汝の無事な事を朝な夕なに案じている。貴房に別れて早や幾月日、北國の布教は、貴房をおいて外にはない。甚々の七難八苦幾度ぞや。我は雪國に於ける汝の身邊を案じない日はない。何事も法の爲め、淨土開教のためには宜しく勉められよ。そして一刻も早く歸られるよう一日千秋の思いである。餘り年寄らぬ内に早く歸られよ。又汝に代つて骨體の丈夫な坊が參る豫定の弟子もいると。

上人は落涙して

恩師上人は、我が身を案じて下さることは、阿彌陀様の御聲を聞くも同様だが、私は歸らない。今の苦難の如きは淨土開教の爲めである。如何に我は枯れ果てるとも惜しくはない。西方に雪を頂く往來山は、今日も亦金色の光だ。正中山からは金色の光明だ。我は此の國を、臨終正念の地と固く定めている。我が師の安泰を遠く津刈の里から深く御祈りする。亦遠い我が郷國石垣には、双親がないから我が願いを御ゆるし下さい。

五年九月十七日、鎌倉から合浦外ヶ濱の檢非違使廳にあつて、金光上人安否の使者が來た。淨土開教の爲めに下向した上人を崇拜すべき旨を書狀を以て之を告げると。時既に晩く、上人今は他界の後である。甲野七衛門は、此の旨を墓前に謹告した。時に上人の墓石は、前に倒れて虚空に幽かな聲あり。日本東西南北の萬民は、皆淨土教に救はれた

と、七衛門は大に喜んで、剃髪出家した。

五 藁籠イデコの棺

三月十日、上人は吐血に苦しんで、一人で寝返りは出来なくなつた。初春とは云へ、北國ツガルの國の末は冬の寒さが去らず。灰色の空は寒風強く、小屋の篠茅の屋根は、雪が一尺餘りも積もつて、小屋の柱はくの字形に今にも折れんばかりに危い。雪解けの水は、上人の床の上に漏つて一枚の水藻の干草で、巨體を包み青い顔で苦笑しながら、口の中で念佛を唱えていた。

三月十二日、上人は、不淨所にも歩くことが出来なくなつた。時に地頭の甲野七衛門が上人の住家に来て、此の様を見て、大に驚いた。近所の藥師竹貞を呼んで、急ぎ見舞つたが、藥師竹貞は、良藥を與えずに返らんとした。七衛門は豆金一貫を竹貞に與えて、其の良藥を上人に飲ました。

三月三十一日、上人は呼吸苦しく、度々吐血した。甲野七衛門は再起を諦めて、心中に寂光往生を祈るばかりである。上人は、あまりの苦痛に寢布を除いたら、何千匹の蟲と卵が縫目に粉雪の如く、惡臭は周邊に漂つた。甲野七衛門は、大に悲哀して云う。何事か云い遣し度いことあらば教えて下さいと。上人は頭を横に振つて、爐の灰に木の枝を以て一行ばかり記した。我は何事も、思い殘すことはな

い。唯汝等は、大慈悲を蒙り、臨終無上の御念佛は淨土に往生する清淨の寶であると。

三月二十二日、昨夜は苦痛を覺えず。上人は淨らかに眠つた。甲野七衛門は我が家から寢具と衣類とを持つて来て上人に着せて新しい床を作つて上人を寢かせた。上人は大に喜んだが、聲は出ないながらも眼でもつて七衛門を拜んだ。床の下から一通の書狀を出して、七衛門に與えた。三月二十三日、上人は妄想の心で、何事も分らなくなつた。西方往來山の彼方に夕日が沈む頃、上人は兩手を合掌し、聲は出ないが口中に阿彌陀經を誦して、夕日の入没する其の安養淨土に往生した。時に建保五年、三月二十三日、此の外の外は大暮六ツ刻である。

上人が甲野七衛門に賜つた書狀には

忝けなくも、ツガルに淨土教流布の佛告を受けて、行脚すること既に幾星霜。未だ其の任を完了することが出来な
いで、死没するのが残念である。願わくば甲野七衛門殿、我が遺骸は、道路の下に埋めて下さい。我は幾萬人の足に踏まれて道行く人々に、前の世に金光坊と稱する、念佛僧の布教は未だ此の地に知られずに葬むられた。數の中では一人でも我が念佛を信じる者が世に現はれた其の時は、我は最上無上の極樂に往生を果すのだ。何卒七衛門殿。吳々も頼み申す。建保五年〇一字不明月六日朝。沙門金光坊合掌。

甲野七衛門殿

上人遺書再筆に、我若し死せば、往來繁しい路眞中に葬り下さい。行末長く阿呆唄と共に世の人に踏まれ、唄に笑

はれながら我は淨土に參らん。ツガル行丘の里に金光の名は消えるとも、西の夕空に金光の輝きは消えず、末世に於て衆生を化度せん。放浪の行脚跡は、夷國の地を行脚し、一向に淨土に身心を捧げつくせるところは皆盡し、出来る事は皆出来かし、寸分の心残りもない。

上人亡語遺言に、北行我が身の幾星霜。心中急げども未だ淨土教は、民族に完布せず。無念である。空しく夷國の土となるが、願はくば恩師法然上人よ。同門の方々よ。津刈の雪の下に、金光坊は永久に眠つたのを輕笑して下さるな。我は七度も再生して、必ず念佛を流布せん。南無阿彌陀佛。と世捨阿彌陀尊を枕邊に、「奥州皆淨土」の五字を張り出して、床中に拜跪している繪畫がある。此の信念、眞に吐血の傳道も、「奥州皆淨土」の悲願を滿せず文字通り、行路病者の生涯を終つた。此の生活の中に然も法悦歡喜を味得した殉教の聖僧金光上人は、我等に何を御示し下さるか。

上人入寂後甲野七衛門は、藥籠を造つて遺體を入れて、恩師上人の御遺言遺言に背き、我が保有林の鈴鳴丘に葬むつた。時に建保五年三月二十七日である。文中藥籠は、當地方ではイヂコと云う。藥を筒形に編み、寒國では乳兒を入れておく器だが、近年まで極貧の家では、其の大形なもののを葬桶に代用したのは、筆者も實見している。

五月二日、七衛門は、我が妻子に田畑を與え、財産を整理し、保有林を伐つて向嶋の家を改造して、金光山西向寺を建てた。九月十七日、鎌倉から、合浦外ヶ濱の檢非違使

廳に上人安否照會の使者が來た。時既に晩く、上人今は他界の後である。甲野七衛門は、此の旨を墓前に報告した。時に上人の墓石は、前に倒れて虚空に幽かな聲あり。日本東西南北の萬民は皆淨土教に救れんと。七衛門は自分の髪を剃つて、出家の道に入り、法名を光靈坊と號したが、同年十二月二十日、中風病が重つて、睡るが如く往生した。時に壽五十八年である。七衛門の長男、十郎衛門も亦、亡父の追善の爲めに佛門に入つて、名を金雲坊と改め、日夜に念佛を誦唱した。七衛門の妻貴美も、長髪を切り落して、法名を曉金尼と稱した。北畠朝臣親國も得道して、西向寺に永代供養のため、毎年白米七十八貫を奉納した。鈴鳴丘の墓地を北澤山北澤山にして、

建保五年春彌生二十五日入寂

奥州皆淨土 大教師 金光上人之墓

爲 大師 法念上人 菩提

三行の字を墓石に刻んで供養した。此の墓石は、上人在世の時正中山から背負つて來た巨石であると。

六 西向の餘光

上人入寂の報を聞いて、中山修驗宗一山の長老が、正中山に會合した。山主忍玄が云う。役行者以後、五百有餘年に亘る、修驗僧に、金光坊如きの偉僧は、未だ出ないことは、無念である。行丘の天地は變らねど、移る浮世に、無

盡の法を遺した、金光坊こそ、永久の生命を得たものである。忍玄坊は、世捨阿彌陀佛に就て、各自々宗の立場から、淨不淨論を闘はし、上人の偉大な、信仰護法心に、修驗宗から、一步進んで、修驗念佛宗に入り、應身院を梵場寺と改稱して、永住した人らしい。上人の分骨を、鎌倉長谷寺に埋葬したり、上人の墓前に参拜したり、中山全山中、唯一の理解者であつたらしい。

法秋院日叵坊が云う。金光坊よ。無情の風に、津刈の里では、坊の説法林は枯れかけたが、やがては芽も出る、花も咲く時が来る。法秋院は、役行者の菩提寺で、石化山にあつたが、日叵坊の經歷は、わからない。法身院の住僧、仙雲坊が云う。彼の坊を死なしたのは、我等にも責任がある。然し宗旨の本源は、枉げられない。心には悲涙の情あるが、我等とて、幾多の苦行を、驗する身だ。法身院は、魔神山の頂上にある。一宗信仰の中心であるが、此の仙雲坊も、來歴不明。然し三人とも、上人の偉大な、殉教者たることは、充分認識してゐるらしい。

西向寺（現在の西光院）は、前述の如く、光靈坊の開創であるが、西向と西光とは、同意語であつても、上人の悲願、奥州皆淨土からは、西に向はせる（淨土歸入）が、當を得たものと思はれる。津輕俗説選には、湊向庵とある。上人寂後十四、五年、寛喜三年には、梵場寺知事が、中山大權現略縁起を記しているが、史實らしいものが、含まれていない。其の後五十年、弘安五年、太民居士が、禪師行狀を編したと云うも、或は後に加筆されたかも知れぬ。

建武元年、法明坊は、大泉院に、役行者と法然僧とを供養して、良玄は等身像を刻したと、百聞草紙にある。正平元年^{十一年}、淨土の信徒が、二千餘に及ぶとあるから、餘程淨土宗勢が、發展したと思はれるが、同年正中山は、修驗禪宗となつた。

應永元年には、正行寺連如は、上人の遺言や、彌陀像の因縁を、同時に靈光坊は、金光坊記を書いてゐるし、翌年同人は、金光坊布教之事を、西方院淨念は、念佛布教記金光坊を、記している。照基坊も亦、金光坊記を出して、金光上人崇拜熱が、盛んとなつたが、時恰も戰亂のため、應仁元年までは、伽藍の整備等は、不可能であつたらしい。同年大光院白雲坊は、修驗宗對淨土宗論を記し、七月上旬の舍利を、法明院（大泉院の支堂）に、埋葬供養した。

第七十八代の法明坊、即禪智坊は、梵場寺を再建し、上人野宿の地、藤崎法輪丘に、西光寺を、行丘に西行寺を、建立したと云うが、何れも修驗念佛宗らしい。文明十年、大泉寺は、淨土宗となると、舉光坊記にあるが、詳細な事情はわからないし、大泉寺も、藩政前は、修驗念佛宗であつたと思はれる。寛永二年金剛坊は、金光記を記し、同十二年、修驗念佛宗大泉寺を、藩命に依つて、淨土宗に改めたが、尙修驗の餘薫は、消えない。正保三年西光寺は、行丘から弘前に移つた。享保二年大泉寺良忍は、金光坊記を^{かいて}ゐるが、一般に淨土宗が寺院の基礎の出來たのは、藩政以後と思はれる。此は修驗宗、修驗念佛宗の、餘勢の強大と、第二第三の金光上人が、出現しなかつた故であらうか。

— 小 説 —

津 戸 三 郎 (下)



鶴 田 湛 泉

重衡が無惨に焼き拂つた東大寺が、俊乗坊重源の献身的な勧進によつて建久六年に至つて漸く大佛殿中門等が竣工するに至つた。三月十二日に落慶の儀が行はれ、後鳥羽上皇は、御母七條院と共に南都に行幸せられ、將軍頼朝も政子と共に、多くの將士を従へて参列した。この盛儀の程を拜もうと、参列の群は山野に充ち溢れて、南都は立錫の餘地もなかつたという。

將軍の隨兵の中に加はつていた津戸爲守は、式が目出度く終つた廿一日、かねてからの煩みを解決せんものと、吉水の庵に法然上人を訪れたのであつた。分別盛りの三十三才になつていた爲守には、種々の悶みが心の中に渦巻いていた。

戦場に於て討ち討たれるのは武士の習いとはいへ、數多くの敵を仆して來た爲守には、一面から考へると、それは罪深いものではあるまいかと反省され初めて來たのであつた。頼朝が旗擧をした石橋山の戦い以來、度々の合戦で多くの敵を殺して輝かしい武勳を擧げて來た彼であつたが、それだけ罪の償いを得る道がないものかと思つて、一日とて安き心はなかつた。

華々しい武勳の影には、討たれたる人の家族の悲嘆があることに考へ及んだ。殊に義弟の嗣信が、義經の身替となつて屋島で華々しく戦死してからは、のこされた妹はや姫と一子次若のうらさびしい孤影を見るにつけ、一層そのことが痛感させられるのであつた。

彼は討たれた人々や、血につながる人々の悲嘆を思うと、自分は血なまぐさい戦場をかけめぐる阿修羅のように思へて、我が身に災

が及びはせぬかと思ひ煩うて慄然たるものがあつた。戦というものは無辜な百姓までも戦禍に追ひやることは、何という恐ろしい罪深いものと思つた。

罪の意識におのゝき吉水の庵を訪ねた爲守は、度々の合戦で武士としてやむなく殺生して來た罪を懺悔し、我が身の助かる道はあるまいかと救いを求めたのであつた。

この時、早や六十三才になつていた溫容な上人は、

「安じ給はれな。亡き人のため念佛を回向し候へば、阿彌陀佛は光は放つて、その人たちも解脱することが出來ます。罪障のかるきも重きも沙汰せず、たゞ口に南無阿彌陀佛と唱へて聲につきて決定往生のおもいをされよ」

と念佛は、自他共に救はれる唯一の道と説き聞かされた。上人の言葉に爲守は、長い間心に去來していた不安の思い迷雲が、一時に消し飛んでしまふ思ひであつた。

淨土の教えをきいて豁然と悟るところのあつた彼は、京に在る間は尙もしばしば吉水に參じて熱心に法を問ねていた。

やがて頼朝の供として關東に歸つてからは、すつかりおちついた氣持で、新らしい奉公の念を抱いて主君に仕へ、怠りない念佛行者となつた。

念佛によつて、心のやすらいを求めると共に、今は如來の大悲の前には、敵も味方も一つに見えて來ていた彼は、討死した味方の兵は勿論のこと、敵方の兵の瞑福を日夜念佛を唱へて厚く祈つていた。

すると、

「熊谷の入道や津戸三郎は、無學な坂東の荒武者であるから、他の學問や修行を教へても仕方がないと思はれて、上人は念佛のみでいゝとさとされたのである。もう少し智慧ある者に向つては、上人でも何も念佛に限るとは教えらるまい」

と影口を吐く者がいた。このことを傳へきいた爲守は腹を立てて、直ぐと上人の許へ手紙を以つて、そのことの不審を訴へてきた。

折り返して上人からは、

「決してさようなことはあるはずがありません。念佛は一切衆生のためのもので、無智だの有智だの、罪あるも無きものも、善人惡人を問うことなく、持戒の者、破戒の者等の區別などありません。みだの名を唱へれば、いづれも一樣に永き生死の闇を斷ち切ります。疑はずして念佛されよ」

と懇切に示されて來た。

ます／＼確信を得た爲守は、上人の門弟の淨勝房、唯頼房を關東の地へ召き、彼等を先達として同信のものが集まつて不斷念佛を勵み合い、又津戸の郷内の諸處に念佛所を建て、そこに念佛行者を住居せしめて念佛を弘めていた。間もなく三十餘人まで熱心な行人を作つたことを上人に知らせるとそれはひとへに、爲守や熊谷の努力によるものであるとの激勵の書狀を貰つてよろこんでいた。

ところが、彼にとつて容易ならぬ問題が起つて來た。元久二年の秋のことである。

前年の元久元年の十月のこと、念佛門の流行を妬んで山門の衆徒は、専修念佛を停止せよと座主に訴へたので、上人はやむなく七ヶ條の起請文を作つて門弟を誡め座主に提出された。次いで翌二年には、興福寺から念佛禁斷の奏莊を朝廷に捧ぐという浄土門の法難が巻き起つていた。まして鎌倉にあつては、榮西が武士の信者を得つたあつた際である。

爲守の熱烈な念佛行者ぶりを眺めて、

「津戸爲守は、専修念佛を信じて衆にすゝめ諸宗を語つてゐる。

誠に不都合千萬である」

と時の將軍實朝に、讒訴する者があつた。

幕府はすてゝおかれずと、彼を召して糾問するという風聞が傳わつた。

爲守は驚いて、宗學を深く究めていない自分に、若しそんなことがあつたらどうしようかと不安にかられ、

「もしさような時には、いかなる返事をすればよろしいものか、返答の言葉と例への文句など假名まじりの文にくわしく書いて御教示願いたい」

と早飛脚を出して、京の上人の許へ尋ね合はした。

折り返して上人から、浄土の要旨と應答の仕方など仔細に書き示した返事が届いた。

爲守は、上人の返書をくりかへし讀んで萬一に備へていた。

いよいよ翌四月廿五日、幕府は政所の執事信濃前司行光の奉行で、宗の仔細お尋ねある旨の御教書が、津戸に下つた。

今は何の恐れもない爲守は、淨勝房唯願房をつれて鎌倉に赴き、

法華堂の前の二棟の御所の南向きの廣廂に伺候した。

廿八日の申刻(午後四時)種々の下問が行はれた。爲守は、上人の教示によつて念佛の教理を、十分腹に入れていたことゝて、訊問に對して己が信ずるところを堂々と述べ答へた。その上、同行の淨勝房唯願房の二人も共に、念佛門の奥儀をるゝ述べて説明したので申し開きが立派に立つことゝなつた。

「専修念佛の行については仔細はない。もとの如く行うてさしつかへなし」

との旨が仰せ出され、公然と許しが出たので、爲守はよろこんで其の後いよいよ念佛行に勵んで行つた。

三

深く念佛行に入つて行つた爲守は、なろうことなら弓矢を捨て出家を遂げたいと思つて實朝に願つたが、その許しは得られなかつた。嫡子の守朝が民部大夫として實朝の寵愛を受けていたし、まして、自分の運命は源家と共に一蓮托生と心に決めていた彼には、激發性の強い熊谷直實のように、とうてい自分勝手な行動は出来なかつた。

出家することは斷念せねばならなかつた彼は、在俗のまゝでもよい、せめて法名を貰ひ戒を受け袈裟をかけて殊勝に暮したいと思つた。そのことを上人に願うと、爲守の篤信に深く感じられた上人は、禁戒の旨を書き示し、袈裟を與へ尊願という法名を名告らせた。

すると又、日頃上人が所持している數珠を所望して來たので、お

しげもなく愛用の念珠を與へられた。

又、渴仰のあまり上人の影像を乞うと、熊谷に畫かせて見たが、餘り出来ばえが、好ましくなかつたものか、

「影像は熊谷入道書きたれども、無下にこの姿たがいたれば、そのかはりに善導和尚の御影おがませずはしますべし候」

と認めて、上人から支那の善導大師の畫像が送り届けられて來た。

こんな風に、心から上人を崇仰してやまなかつた爲守は、折にふれ身邊の模様をつたへられた書狀や、念佛の要儀を書き示して賜つた上人の數々の文を、錦の袋に大切に納めて肌身から決して離さなかつた。

やがて承久元年の正月廿七日、鎌倉中を驚愕させる事件が起つた。數日前から降り續いた近來稀な大雪は、積もり積もつて二尺餘に達した。

その日皚々たる静かな更け鶴岳八幡宮に於て、實朝が内大臣から右大臣に昇進した大臣拜賀式が行はれた。夜陰の森嚴な神拜がとゞこもりなく終つて、伶人等が樂を奏する中を社殿を退出した實朝が雪の境内を盛んに火華を散らし照らす松明に導かれ靜かに石段を下りた時、飛鳥の如く襲いよつた公曉に刺され、社頭の雪を鮮血に染めたのであつた。

翌廿八日の辰刻、實朝の夫人は落飾され、武藏守守親、左衛門大夫時廣、前駿河守季時等、御家人百餘人は、薨去の哀傷に堪えずに出家を遂げてしまつた。

この時、爲守にも出家の赦しが出て多年の宿望をとげ、上人から

貰つた尊願という法名をそのまゝ名乗つた。

二位の尼の計らいで實朝の遺骨が爲守の許に渡されると、爲守は日頃の恩顧を思つて實朝の菩提を厚く弔い朝夕香華をたやさなかつた。

主君實朝に對しての追慕の情はさることながら、在世の間始終教示を仰いでいた上人のことがいたくしのばれて、例の肌身からはなさぬ錦の袋から上人の温情こもつた書狀を取り出しては、なつかしげにくり返し／＼眺めては亡き上人の面影をしのんでいた。

上人示寂後三十年のこと、早や八十の高齡に達した尊願は、淨土に我から往生したいとの念が熾烈となつて來たものらしい。仁治三年十月廿八日から三七日の如法念佛を始めていたが、滿願の十一月十八日の夜半のこと、道場の明り障子の内に於て高聲念佛數百遍唱へ終つた後、自ら腹を斷ち切つて五臓六腑をつかみ出し練大口に包んで夜半にひそかに家人に捨てさせた。が死にもせず疵も癒え、五十七日餘も氣力も弱らず相變らず念佛して、翌四年正月十五日、午刻往生を遂げたのであつた。

念佛生活とは、如來の大悲に浴しての日々の營みに、充ち足りたる無上のよろこびを見出して生き抜くことであつて、その故に、自害往生、燒身往生、入水往生、斷食往生等は決してすべきものでないと、上人は日頃門徒に對して固く誡め置かれていたことであつたが、

「武士と上人（僧）とは、多く最後に到りて耻辱を顯す」

と人の最後は最も大切なものと教えられていた爲守のことであつたから、或は思い切つてこうした舉に出たのかも知れない。（了）

阿彌陀經の理解 (四)

福 富 海 岳

尊き哉!! 現在其前

(29)

阿彌陀經を拜讀してこの「現在其前」というお言葉ほど有難く尊いものはない。「現在說法」というお言葉も非常に有難いがそれよりもより直接である。宗教の問題は結局佛在りや否や、神在りや否やに歸するが、それは理論や學問ではなく、直接感することのできる實感でなくてはならない。すなわち念佛することによつて感ぜられる實感である。なぜ念佛することによつて佛が實感されるのであろうか。それは阿彌陀佛が實在し給うからであるに外ならない。私たちは親が子供である自分を呼んで呉れる「聲」に親の生命と智慧と愛情を感じ、親は必ず子供たる自分が、

「父!」と呼び「母!」と呼ぶ聲に求めているものを知つてその要求を満足させてくれる。だから親を呼ぶ子供の「聲」の中にも、親の生命と智慧と愛情を信賴している子供の生命と智慧と愛情が宿つていることを知るのである。佛が念佛往生の本願を成就し衆生をして我が名を唱えしめられることは全く佛あることの自然であり必然である。衆生の佛を呼ぶ聲が眞實にして深いものであり、その眞實の中に一切が傾け盡されていけば、佛は必ず衆生の要求を知り、その生命と智慧と慈悲との限りを盡し、衆生の生命と智慧と慈悲とを百倍千倍にして、決定して淨土に往生せしめられるのである。

いま私たちは阿彌陀經を讀誦しているのではない。直接、報身佛である釋尊の說法を拜聽しているのだから、これは

間違なく現在說法で、肉眼をもつて拜することができなくとも稱名念佛すること一心不亂なれば佛は必ず現在其前し給う。それは釋尊であると共に彌陀であり、彌陀であると共に釋尊である。しかもそれは臨終でなく現實であつて、阿彌陀經等を讀誦し念佛の聲するところに釋尊も彌陀も法然上人も現在其前し給うのである。大經に

「佛の遊履するところの國邑丘聚化を蒙らずといふことなし。天下和順し日月清明なり。風雨ときを以てして災厲おこらず、國ゆたかに民やすくして兵戈もちゐることなし、徳を崇め仁を興して務めて禮讓を修む。」

とあるが、本經等を讀誦し念佛することが如何に大切であるかを深く認識しなくてはならない。

釋尊の證誠勸信

本經は應身としての釋尊の說法ではなく、報身としての釋尊の說法であることは前言の通りで、應身としての釋尊なしに報身の釋尊はあり得ないから、釋尊の說法であるという意味では何等變りはない。法然上人の「阿彌陀經釋」によると、佛法の奥義は淨土でなければ眞に學ばれないという意味のことが明かにされている。すなわち眞言宗の奥義を極めたいと思えばこの世で眞言宗の書物を讀むよりも念佛して淨土に往生した方が早い。淨土へ行けば不退轉の

人々や一生補處の人が澤山おられるから、そういう人々につけば眞言の法を極め盡すことができるというのである。このことは天台、華嚴その他の宗旨についても同様で、この世の限られぬ範圍だけでは何うしても極め盡されぬというのである。従つて釋尊が報身としての彌陀の立場に還られたということは、何者にも局促されない自由にして一層廣い意味に於ける佛として彌陀と一體になられた大說法で、そのまゝが彌陀の現在說法ということになる。それが本經に說かれている念佛の法門であるに外ならず、この五濁惡世で成佛せられた釋尊でなければ、實踐し理解し說法することのできなかつたことである。「我見是利」といつて釋尊が證誠勸信して下さらなければ私たちはこの念佛の法門をどうしても理解することができないことを知らなければならぬ。何んという深いよろこびであり感謝であらう。

六方諸佛の證誠勸信讚歎護念

元祖大師法然上人は一枚起請文に

「此外におく深き事を存せば、二尊のあはれみにはすれ本願にもれ候べし。」

と仰せられ、證誠勸信の深さが實に力強く感ぜられる。

勅傳第六に、善導和尚の觀經の疏の

「一心專念彌陀名號行住坐臥不問時節久近念々不捨者是名正定之業順彼佛願故」

の文をあげ、

「順彼佛願故の文、ふかく魂にそみ、心にとゞめたるなり。」

と示されている。本經に於いて六方（實は十方）恒沙の諸佛が廣長の舌相をだして徧く三千大千世界を覆い證誠勸信讚歎護念されている所以である。それは賢も愚も敵も味方も一人ももれなく救われることのできる彌陀本願の念佛であるからだ。釋尊は「我見是利故說此言」と仰せられ、一切衆生を悉く眞實に救ふことのできる道として念佛往生にしくはないことを眞證されたが僅かこの八文字によつて、彌陀本願の念佛がそのまゝ確かに釋尊の本懷であり、法然上人のみ心であることが理解される。「二尊のあはれみにはすれ本願にもれ候べし」とあるのがそれで、わけても「本願」の二字に對しては「ふかく魂にそみ、心にとゞめたるなり」と仰せられている。

従つて六方諸佛のみ心も釋尊や法然上人と全く同一で、そこに限りなき證誠勸信讚歎護念が力強くしかも自然になされる。そこで私たちは念佛の衆生が人間として如何に尊いものであるかを理解しなくてはならない。觀經には「若し念佛せむ者はまさに知るべし此の人は是れ人中の分陀利華なり」とある。また「淨土宗略抄」に

「彌陀の本願を深く信じて念佛して往生を願ふ人をば、彌陀佛よりはじめ奉りて、十方の諸佛菩薩、觀音勢至無數の菩薩、この人を圍繞して行住坐臥よるひるをもきらはす、影の如くにそひて諸の横惱をなす惡鬼惡神のたよりを拂ひ除き給ひて、現世には横さまなる煩なく安穩にして、命終の時は極樂世界へ迎へ給ふ也。」

とあつて、特に本願念佛の有難さが理解される。従つて諸佛の悲願も一に彌陀本願の念佛にあるのである。その時だけの事情境遇に支配されて念佛せよというのではなく、彌陀の本願を深く信じて念佛して往生せよというのである。人はその時だけの事情境遇に支配されて生きているのではなく、使命を達成し本願を成就するために生きている。そこに諸佛諸神の證誠護念あるべきが必然であつて、諸佛諸神による護念成就の力なしに人はその使命を達成し本願を成就することはできない。本經で「稱讚不可思議功德一切諸佛所護念經」たる所以であつて、一般の宗教に於いては勿論のこと、佛教經典の中でも殆んどこのようなのは例がないのではないだらうか。法華經に見塔品があつて、七寶の寶塔が地中から涌出し、釋尊が説かれている法華經が眞實であると證誠しているが、まだ本經の如く十方諸佛が證誠勸信讚歎護念されてはいない。念佛往生の本願は、釋迦彌陀二尊一致の道であるばかりでなく、また實に十方一切諸佛の道である。善導大師は觀經疏の深心の説明の下で二河

白道の譬喩を説いて念佛する者の實生活に於ける規範を明らかにされているが、私たちはこの六方段を讀誦するに及んで一層安らかにしてま廣き二河白道を發見することができ。一枚起請文に、

「但し三心四修と申すことの候は皆決定して南無阿彌陀佛にて往生するぞと思ふうちにこもり候なり。」

と仰せられ、念佛者の足下に萬人等しく開かれる白道精進への方法が簡明に示されているが、この六方段に於ける諸佛のみ名を私たちはたゞ徒らに讀過してはならない。現實に常に證誠護念されていることを確信し、一切の疑念を去り、日課稱名念佛怠らず、最後臨終の夕まで白道精進することを怠つてはならない。こゝにこそ人たる所以が明かにされるのである。

眞實の宗教

本經を一部始終拜讀して痛切に感ぜられることは眞實の宗教が何であるかということである。その時、その場合だけの事情境遇によつて祈りや祈願の対象となるものではなく、その時、その場合を常に満足しつゝ人生の始終を貫いて眞に人たる所以を完うすることのできる本願の宗教でなくてはならない。阿彌陀佛の本願が一切諸佛の大智大悲の結晶であるように、眞に人たる所以の結晶が人の

使命であり本願である。従つて人間自身に本願あることの苦惱なしに佛の本願を自知することはできない。白いものを白と知り黒いものを黒と自覺することが自分の力でないと同様に、自身に本願あることの自覺とその自覺に對する苦惱とは共に如來本願力の照益であり攝取不捨の力である。だから如來の本願と私たち衆生の本願とは大と小、全體と部分との相違はあつても一貫のもので、そのなかに同一の生命と智慧と慈悲とが流れ傳つて來ている。彌陀本願の念佛を深く信じて往生を願う人たちに釋迦彌陀二尊の慈育はもとより十方一切諸佛の護念成就の力が親のその子供に對する如く全く自然に照益されることが理解されるであらう。祈つたから祈らないからではなく、「父」と呼び「母」と呼ぶことが自然であるように、たゞ南無阿彌陀佛と申せばよいので別に子細のあるべき道理はない。この外に奥深いことがあると考えることは、二尊のあはれみにはすれ、本願にもれることである。すなわち「南無阿彌陀佛」という言葉は我等人類がもつている最高至上の眞實語ということになり、本經が「一切諸佛所護念經」たる所以である。だからこの諸佛所説の名を聞いて念佛する者こそ攝取不捨の故に、一切諸佛に護念せられるが故に不退轉に進歩向上やむことなく無上正等正覺に到ることができるのである。

浄土の會員を一人でも多く

◆どなたでも會員になれます。

◆會費は半年二〇〇圓、年額四〇〇圓です。

◆會員には毎月浄土を配布します

◆この會は皆様の會ですからその發展の爲に、

お一人でも多くの會員をつくつて、正しい信仰

運動をひろめましょう。お知合の方にぜひおす

ゝめ下さい。

◆お申込は振替（東京八二一八七番）を御利用下さい。

東京都品川区上大崎一の七八二

法然上人鑽仰會

編集後記

○朝夕は、秋の冷氣が感じられるようになりました。二百十日、二十日もことなく過ぎ、村の祭りの太鼓きき、みゆりを収めて行くだけに私達の生活の中で、やはり季節感は大きな意味をもっているようです。

○本欄の「芝園のだより」が消えてから久しいが、その間にずいぶんと芝園も變つた。

増上寺大股裏には一大宗教センターが出来たそうだし、その隣りにはホテルの建設も始まつている。又昔の紅葉館あとには、東洋一と稱するテレビ塔が建設されていく。芝公園も脱皮せざるを得なくなつたのか。

○本誌も脱皮を計るべく準備し、大變は、關係者總執筆にておとどけ致します。前進主義により、よりよき雑誌をと心掛けて精進してまいります。

○十月九日には前進の爲めの編集會議を行う豫定。

（水谷）

會費（誌代）

半年二〇〇圓・一年四〇〇圓です。前金切の節は、精算通知を致しますから、折返し御送金下さい。御送金は便利で安全確實な振替を利用して下さい、千圓まで二五圓の手数料で且、通信も書けます。新しい市は必ず縣名を、又、新規か繼續會員かを明記して下さい。

「浄土」 九・十月號

昭和十年五月二十日
第三種郵便物認可

昭和三十三年九月廿五日印刷
昭和三十三年十月一日發行

（定價三十圓）

編輯人 竹中 信常

發行人 佐藤 密雄

印刷人 春山治部左衛門

印刷所 共立社印刷所

東京品川区上大崎一ノ七八二

發行所 法然上人鑽仰會

振替東京八二一八七番

若い世代の人々のために!!

大正大學教授

竹中 信常 著

宗教心理の研究

A五判 五九〇頁
定價二二〇〇圓 千實費

宗教が現代人の心理にどのような影響を受けとられているかという
ことを、古來の學說史に即して説明すると共に、信仰の心理
靈感の心理、宗教心等をテーマとしてとり上げている。宗教を
理解し、信仰を他に傳へんとする者にとつて必讀の書である。

東京都中央區京橋二の一（鹽山ビル）

發行所

青山書院

振替東京 九九三〇三番

東京都品川區上大崎二丁目七八二

取扱

法然上人鑽仰會

振替東京 八二一八七番

幼兒教育に専心する方々へ!!

指導外語教授 增谷文雄 畫中村ひろし
監修 東大、大正講師 增谷文雄
教有 法然さま
定價B五判 一〇四頁
定價C三〇圓 千實費
（十部以上二八圓 千實費）

浄土門主

岸 信宏 貌下

大正大學長

推尾 辨 匡大僧正

増上寺法主

香 月 善裕 師

知恩院執事長

渡 邊 眞海 師

浄土宗務長

この本は繪ときをもつて、わが宗祖、法然上人の御生涯と御
教旨を、少年少女に、わかりやすく、かつ親しみやすく描き
出したものであります。しかも、その内容は、國寶「勅修御
傳」によつたものであります。

値段改正中 材料値上りの爲お値段は下記の一・二割高です

銀ブランコ2人乗	¥ 13,000
銀ブランコ3人乗	¥ 15,000
銀ブランコ4人乗	¥ 22,000
銀ブランコ6人乗	¥ 26,000
縋子ブランコ4人掛	¥ 13,500
太鼓橋	¥ 10,000
ジャングルジム中型	¥ 28,000
單式滑臺中型	¥ 23,000
複式滑臺中型	¥ 36,500
動物付き遊動木	¥ 30,000

此他各種、一冊カタログ送

配達費（都内横濱 500 圓以内
其他1000圓以内）組立無料。

小田原・熊谷・土浦以遠は丸通
送り、（荷造費當社・送料着拂）

冊以認明書送付



幼稚園 運動遊具

全國幼稚園・保育園・小學校・各團體に、良品を廉價にのモ
ットで、堅牢安全な遊具を納入、好評を頂いております。松
音・光明・芝・明照等の浄土宗幼稚園採用。

篠澤鐵工所

東京都大田區堤方町 7 1 8
電(75) 1024 (池上驛東3分)